

靈的盲目の原因：真実を見ることを阻もうとする力 ヨハネ 9:13-26

1. 彼らは、前に盲目であったその人を、パリサイ人たちのところに連れて行った。ところで、イエスが泥を作って彼の目をあけられたのは、安息日であった。こういうわけでもう一度、パリサイ人も彼に、どのようにして見えるようになったかを尋ねた。彼は言った。「あの方が私の目に泥を塗ってくださって、私が洗いました。私はいま見えるのです。」(9:13-15)
 - a. 前はイエスが生まれつき盲目の男をいやす話を読んだ。
 - b. 興味深いことに、ヨハネ 9:11 ではこの盲目の男はイエスが誰であるかも知らなかった。彼は単に「イエスという方」（予言者、メシヤ、ダビデの子、などではなく）と呼んでいる。
 - c. 今日は肉体的、靈的盲目よりももっと大きな問題について見ていこう。
2. すると、パリサイ人の中のある人々が、「その人は神から出たのではない。安息日を守らないからだ。」と言った。しかし、ほかの者は言った。「罪人である者に、どうしてこのようなしるしを行うことができよう。」そして、彼らの間に分裂が起こった。そこで彼らはもう一度、盲人に言った。「あの方が目をあけてくれたことで、あの人を何だと思っているのか。」彼は言った。「あの方は預言者です。」(9:16-17)
 - a. すべての人類は創世記 3 章の墮落以来、靈的盲目（あるいはその類のもの）を持っていると思う。ヨハネはおそらくこの生まれつき盲目の男と同じように私たちも生まれつき靈的盲目を持っているのでこの逸話を使ったのであろう。
 - b. しかし物が見えない原因は肉体的盲目だけではない。私たちの多くは「組織化盲目」（と呼ぶことにしよう）の状態にある。これはこの世でどのように物事を見、考え、応答するかを系統的に教え込まれることによる（社会条件への服従）
 - c. ヨハネは、パリサイ人の何人かはこの奇蹟が安息日に行われたため神から来たものだと認めることができなかつたと言っている。彼らはすべての行為、それがたとえ盲目をいやすような奇蹟でさえも罪だと教え込まれていた。聖書的には安息日は聖なる休みの日であるが、この時代にはすでにそれは法的悪夢となりつつあった。それは聖書に何と書いてあるかということよりもその解釈に重さが置かれてしまっていたのである。（エコーチェンバー効果 — 自分と同じ意見を持った集団の中に身を置くことにより偏った考えが助長されてしまうこと）
3. しかしユダヤ人たちは、目が見えるようになったこの人について、彼が盲目であったが見えるようになったということに信ぜず、ついにその両親を呼び出して、尋ねて言った。「この人はあなたがたの息子で、生まれつき盲目だったとあなたがたが言っている人ですか。それでは、どうしていま見えるのですか。」(9:18-19)
 - a. パリサイ人の弁護をするならば彼らはこの奇蹟を立証したり反論できるシステムを持っていた。男は自分が生まれつき盲目であったことを皆に公言していたが、周りの人々は 100%の確信がなかったので(9:9)、彼らは男の両親に尋問する。真実を得るためには情報を意図的に調査することも時には必要である。それをしないと私たちは真実であるにかかわらず信じたいことだけを信じてしまう。
 - b. 残念なことに真実を確かめるためのシステムがあつたとしても、私たちはその過程に我慢できず、自分が望む結論へと跳んでしまう。それはその事項が真実であるから、というわけではなくただ自分がそうあってほしいという願望なのである。ここではパリサイ人は男が生まれつき盲目であったかどうかをその両親に確認する(9:18-23)。
 - c. 両親は息子が盲目であったことは認めるが、ユダヤの指導者たちからそれ以上しゃべらないように脅されていた。このような恐れや脅迫なども盲目に陥る要因となる。真理を伝えるのを阻もうとする力が働くと、真理はそれを分かつ剣となる(9:39)。
4. そこで彼らは、盲目であった人をもう一度呼び出して言った。「神に栄光を帰しなさい。私たちはあの方が罪人であることを知っているのだ。」彼は答えた。「あの方が罪人かどうか、私は知りません。ただ一つのことだけ知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということです。」そこで彼らは言った。「あの方はおまえに何をしたのか。どのようにしてその目をあけたのか。」(9:24-26)
 - a. またもや、安息日の規定を守ろうとし、さらにはイエスを反証しようとするパリサイ人たちは、イエスがメシヤであることを示した奇蹟のすばらしさを理解することができなかった。
 - b. 真理とは仮定的、知的に聖書を追究する中にあるのではなく、この聖書の著者である神を知ることにあるのである。